

国立国語研究所学術情報リポジトリ

談話研究と言語教育：1960年代から現在までの流れ

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00003017

談話研究と言語教育

—1960年代から現在までの流れ—

宇佐美 まゆみ
国立国語研究所

要旨

「談話 (discourse)」という用語がよく聞かれるようになってかなりの年月が経つ。「談話研究 (discourse studies)」という用語は、1970年代頃でも、言語学のみならず、心理学、哲学、文化人類学などの関連分野でも使われてきたが、最近では、学際的研究のさらなる広がりを受けて、政治科学、言語処理、人工知能研究などにおいても、それぞれの分野における意味を持って使われるようになってきている。本稿では、まず、「談話」という用語が言語学に比較的近い分野においてどのように用いられてきたかを、1960年代頃に遡って、7つのアプローチに分けて、概観する。また、「談話分析」や「会話分析」と「第二言語習得研究」、「語用論」、「日本語教育」との関係について簡単にまとめる。さらには、1980年代以降のさらなる学際的広がりを受けての「政治科学」や「AI (人工知能) 研究」における用語の用いられ方にも触れ、それらの分野との連携の可能性についても触れる。

【キーワード】 談話研究、会話分析、語用論、日本語教育、第二言語習得論

Keywords: discourse studies, conversation analysis, pragmatics, Japanese language education, second language acquisition

1 はじめに¹

広義の「談話研究 (discourse studies)」は、既に 1970 年代頃から、言語学のみならず、心理学、哲学、文化人類学、社会学などでも使われてきた。むしろ、言語学のほうが、関連分野の影響を受けて、社会言語学、語用論などが盛んになってきたという面がある。1980 年代以降は、さらに、言語処理、人工知能研究などにおいても、「談話」という用語が、それぞれの分野における意味を持って使われるようになってきている。しかし、「談話」という用語は、あまりにも様々な分野で用いられるようになっただけに、用いられる分野や文脈によって、その意味するところや受け取られ方が、微妙に、或いは、大幅に異なっているのが現状である。そのため、「談話とは一体何なのか?」、「談話分析と会話分析は、同じなのか違うのか、違うとしたら、どう違うのか?」「談話の研究は、今、どういう分野で行われているのか」、「どのように言語教育の役に立つのか?」などの疑問をお持ちの方も多いかもれない。

そこで、本稿では、主に、「談話」という用語が様々な分野でどのように用いられてきたのかを簡単に整理するとともに、「談話分析」や「会話分析」が「外国語／第二言語習得研究」や「日本語教育研究」の流れとどのような関係になっているのか、また、最近の言語

処理、人工知能研究における捉えられ方など、学際的研究動向の中でいかなる展開を見せつつあるのかについて概観する。

2 言語研究における「談話分析」と「会話分析」、その「談話研究」への展開

ここでは、まず、言語研究関係に絞って、その用語の使われ方の違いなどを振り返る。「談話 (discourse)」の定義は、厳密には各研究者によって異なる面もあるが、大きくは狭義と広義の二つの捉え方に分けることができる。古典的 (1960 年代) には、狭義のものは、「談話とは、文レベルを超えた意味的まとまりをもった言語的単位」であるという、あくまで言語を中心にした捉え方が中心で、それにかかわる研究は、あくまで言語学の一分野として、「談話分析 (discourse analysis)」と呼ばれることが多かった。このタイプの研究は、文字通り、文レベルを超えた、一文ではない二、三の文が、「意味的まとまり」を持つ「談話」として結束性を保つために、どのような言語的装置 (linguistic device) が使われているか (前の文の主語を次の文が代名詞で受ける等) と、その規則を明らかにしようとするのが主目的であった。そのため、主に、書き言葉を対象としており、1970 年代初頭までは、文レベルの言語学で有効とされてきた方法を談話にも適用して、「適格性、不適格性の判断」を直観に基づいて行うという研究方法が取られることが多かった。当時、文法や文型の指導が重視されていた言語教育の分野でも、60 年代後半に、「談話」という用語が用いられるようになった当初は、この狭義の意味合いで用いられることが多かったと言える。

一方、二、三の文の集まりとしての談話という狭義のものも含むが、むしろ、「談話」の広義の捉え方とは、もっと長いものを主に意味し、話し言葉では「会話 (conversation)」、書き言葉では「テキスト (text)」などと呼ばれることが多い。狭義の「談話分析」は、構造を重視した言語学の影響を受けたものという印象が強かったが、言語学分野における広義の「談話分析」は、「インタラクティブの社会言語学 (Interactional sociolinguistics)」の創始者 J. Gumperz (1982) や、言語教育関係者には、「伝達能力 (communicative competence)」という用語の創始者としてよく知られている、D. Hymes の「ことばの民族誌 (Ethnography of speaking)」研究 (1962, 1974) からのアプローチなど、言語学の関連分野としての文化人類学における研究方法や成果を取り入れながら、Hymes や Gumperz らの指導を受けた社会言語学者である D. Tannen ら (1984) が発展させることになる。言語学における「会話の分析」は、狭義の「談話分析」ではなく、より長い「会話」をその研究対象とし、研究の目的も、「言語構造の分析のために、文レベルを超えた談話という単位を対象とする」というよりは、人間社会のダイナミクスを反映している「談話」、或いは、「会話のやりとり」を主な興味の対象とするものと言えるだろう。

また、1960 年代から 1970 年代には、H. Sacks ら (1974) に端を発する社会学の一派としてのエスノメソドロジストが行ってきた会話分析 (Conversational Analysis) も、会話データを対象とする言語学者に影響を与え、現代に至っている。用語としては、英語では、エスノメソドロジストが「会話分析 (Conversation Analysis : CA)」という用語を用いていたことから、Tannen らが発展させてきた「会話の分析」は、英語では、“Conversational Analysis”として、エスノメソドロジストの「会話分析 (Conversation Analysis : CA)」とは区別されている。

このように、会話をデータとする研究については、主にアメリカで、1970 年代頃から、「ことばの民族誌」(Hymes 1962, 1974)、「CA (会話分析)」(Sacks, Schegloff & Jefferson 1974)

など関連分野に影響を受けながら、「インターアクションの社会言語学」(Gumperz 1982; Tannen 1984 等)として展開し、現代に続いている。

どちらかと言うと、初期は、質的分析が主であったが、1980年代以降は、言語学者、心理学者、認知科学者、工学者などが連携して、書き言葉のコーパスのみならず、話し言葉、すなわち、「談話のコーパス」を作成する動きが英語を中心に盛んになった。M. Tomasello ら (1985, 2003) に代表される言語使用に基づいた談話コーパスの作成も意識した「使用基盤言語学 (Usage-based Linguistics)」的アプローチなどがその例である。このアプローチは、大量の言語データをデータベース化する必要性などから、工学者も含む学際的分野となっているが、これにかかわる言語学者の主関心は、言語、談話の「構造」解明にあり、インタラクションというよりは、むしろ、狭義の談話分析の関心と通じるところも多い。

これらと区別するかのように、心理学者は、“自然会話分析 (Natural Conversation Analysis)”や“談話処理 (Discourse Processes)”という用語を用いるなどして、分野によって、用語の使い分けをして、依拠するアプローチの特徴を示す傾向もある。自然会話コーパスに関しては、日本語においては、2000年代中頃には、言語構造ではなく、人間の相互作用の分析を主目的とし、語用論的分析に適するように開発された自然会話コーパスも公開された (宇佐美 2007)。

一方、言語学の流れの中における書き言葉の研究は、「テキスト言語学」と呼んで、話し言葉の「談話分析」と区別する傾向もあり、これは、1970年代後半頃から、特にヨーロッパで盛んになっていた (Halliday & Hasan 1976 等)。1980年代に入ると、ヨーロッパでは、R. Wodak らに代表される、言語表現の背後にあるイデオロギーを重視した社会批評的観点から談話を分析する「批判的談話分析 (Critical Discourse Analysis : CDA)」(Wodak (ed.) 1989; Weiss & Wodak (eds.) 2003) が盛んになり、現代に至っている。この分野になると、政治科学 (political science) などともかわるものが多く、言語学の枠にとどまらず、その学際性がさらに広がる。

用語の観点からまとめると、日本語では、「会話分析」と言うと、エスノメソドロジストの社会学のアプローチを想起する人もいれば、Tannen ら社会言語学者のアプローチを想起する人もいるなど、人によって捉え方が異なっているのが実情である。最近では、エスノメソドロジストの会話分析 (CA) が盛んになっており、逆に、CA 的アプローチでない「会話の分析」を、「談話分析」と呼んだり、「自然会話分析」と呼んで、CA とは異なるアプローチであることを示す傾向もある。また、心理学者のアプローチを想起する人は、言語研究者には、未だ少ない。今のところ、筆者は、「会話分析への言語社会心理学的アプローチ」のように、特定のアプローチを明記する場合以外は、いかなる立場、アプローチのものも含む用語として、文脈に応じて、「会話の分析」、或いは、「談話研究」という用語を用いている。学際性が増した昨今では、「談話研究」という用語が、最も包括的なので筆者はこれを用いることが多いが、一方、この用語では広すぎてより具体的な内容がイメージできないという人もいだろう。それは、各研究者が論文の内容から判断するしかない。

3 関連分野における「会話の分析」へのアプローチの特徴と用語の使い方

これまでは、工学者は、機械翻訳やトピックの自動検出、要約研究など、談話構造に関する知見を生かして、それをなんらかの形で機械化することに取り組んできた。これらのアプローチは、「自然言語処理 (natural language processing)」、「コンピュータ言語学

(computational linguistics)」などとして発展してきている。それが1980年代に入ると、工学においても、対話や会話に関する興味が高まってき、研究も進んだ。2010年代も終盤になった最近では、スマート・スピーカーが、身近かになってきている現状からもわかるように、人工知能研究の発展により、説得対話システム(平岡他 2018)や、運転支援エージェント(宮本他 2018)など様々な目的を持つ知的な対話システムや対話ロボットが開発されるようになってきている。この分野では、「談話」「会話」という用語よりは、「対話」という用語が使われることが多い。これらのシステムでは、対話における応答を、サーバー側において、自然言語処理された音声認識結果をディープラーニング等によって学習させ、応答結果をスピーカーから出力する形となっているものが多いようだ。これらの分野の最近の発展には目覚ましいものがあるが、一方、エージェントは、未だ機械的な話し方しかできないという限界も見せており、より人間らしい話し方をエージェントに実装するために、相手や場面に応じた発話方略やポライトネスを実装するための理論、及び、発話の仕方による違いが人に与える印象や関係性構築にもたらす効果等に関する研究の必要性が、工学側から要望されている。

このような状況の中、談話を広義に捉えている分析や学際的研究を指す場合、先に述べた狭義のものと区別するためにも、「談話分析」ではなく「談話研究(discourse studies)」という用語が用いられることが多くなってきた。かかわる分野も言語学のみならず、心理学、認知科学、文化人類学、社会学、工学、知能情報学などと広範に渡り、その研究目的も、方法論も益々多様になってきている。特に、「談話研究」というと、それは、言語学の一分野というより、多様な分野の分野横断的な、学際的な研究群となっていていえる。

上記2で概観したような状況を踏まえて、ここでは、言語学のみならず、関連分野も含めて、簡単に、会話の分析に対する異なる興味、方法・アプローチを整理する。主に、方法論の観点から、大まかに分類すると、以下の7つに分けられるだろう。(1) H. Sacks らに端を発する社会学の一派としてのエスノメソドロジストを中心に行われている会話分析(Conversation Analysis: CA)、(2) 相互作用の社会言語学(Interactional sociolinguistics)のGumperz らや「ことばの民族誌(Ethnography of speaking)」のHymes らの影響を受けて発展したD. Tannen に代表される社会言語学者を中心とするもの(Conversational Analysis と呼ばれることが多い)(Tannen 1984 等)、(3) M. Tomasello らに代表される言語使用に基づいた話し言葉の談話コーパスの作成も意識した「使用基盤言語学(Usage-based Linguistics)」的アプローチ、(4) 発達心理学者らによる第一言語習得研究、養育者と幼児の社会的相互作用研究の一環として行われている会話の分析、社会心理学者の研究(Snow 1992; Snow et al. 1990; Budds, Locke & Burr 2017) 等、(5) 認知心理学者、認知科学者らによる認知の社会性の記述・解明を目的とするアプローチ(Potter & Edwards 2012)、(6) N. Fairclough (1995)、Wodak ら(1989)に代表される、社会的・政治的支配がテキストと対話によって再生産されるプロセスを重視し、社会的な不平等を解消することを目的とした学際的なアプローチである(批判的談話研究(Critical Discourse Analysis))、(7) 知能情報学関係の研究者による「ヒューマン・コンピュータ・インタラクション(HAI)」のメカニズムの解明やロボットへの応用を目的とするアプローチ(西田 2000; Nishida 2017 等)。

(7) は、昨今の情報工学の発展に伴うもので、情報処理学会の「ヒューマン・コンピュータ・インタラクション」、電子情報通信学会の「ヒューマン・コミュニケーション」のグループ等における、人工知能の開発を視野においた「会話の分析」である。1994年に設立

された言語処理学会は、設立当初から、人工知能研究における言語処理研究と、言語学における研究の交流・相互発展の場とすることを企図していたというが、有機的な相互発展にはなかなか結びつきにくいという現実と直面していた。しかし、最近、再び、人工知能研究と言語研究分野との相互交流を促進しようとする動きが活発になってきた²。

これら7つのアプローチを「量的分析」か「質的分析」かという観点から大まかに分けてみると、「質的分析」にあたるのが(1)のエスノメソドロジストたちによる会話分析(CA)、(2)の相互作用の社会言語学的アプローチの会話分析、(5)の認知心理学者、認知科学者らによる認知の社会性の記述・解明を目的とするアプローチの中の会話分析、(6)の「批判的談話分析(CDA)」である。一方、「量的分析」が行われることが多いのが、(3)の「使用基盤言語学」的アプローチ、(4)の発達心理学者らによる第一言語習得研究、そして、(7)の「知能情報学」における「対話」へのアプローチである。ここで注意しておきたいのは、言語学分野では、「談話」「会話」が、先述したようにある程度の区別を込めて使われているが、言語学の分野を超えた隣接分野になると、「批判的談話研究」などの人文科学、社会科学を中心とする学際的分野では、「言説」という用語が用いられることが多く、「知能情報学」の分野では、もっぱら「対話」という用語が使われている感がある。

(1)、(2)は、日本語教育研究にも様々な形で取り入れられている感があるが、(1)のエスノメソドロジストたちによる会話分析は、社会学における一アプローチで、社会の中に何らかの「規則性」を見出そうとするという意味での「秩序(一般化)への意志」はあったが、ここでいう規則とは、言語自体の文法的規則ではなく、社会秩序を保つための規則であり、会話参加者の持っている前提や常識、言外の意味(含意)や会話における沈黙などが重視された。代表的な成果として、「会話の順番取りシステム(turn-taking system)」、「隣接応答ペア(adjacency pair)」、「選好(preference)」、「会話の開始部(opening)」、「会話の終結部(closing)」の構造を明らかにしたものなどがある。いずれも、一見恣意的に行われているように見えている日常会話の中にも、「秩序/規則性」があるということを明らかにしたものであり、これらの成果は、言語学における会話分析(談話分析)、語用論にも大きな影響を与えた。

(2)の相互作用の社会言語学的アプローチは、言語人類学者の Gumperz が創始者であり、言語は、様々な文化や社会の抱える言語に関わる社会的、人種的問題の解決法を模索する手段となるべきであり、種々の問題の解決のためには、単なる「抽象的な研究対象」としての言語ではなく、「現実社会で使用されている言語」の実態を研究する必要があると主張したことに端を発している。ただ、その後を引き継ぐ形になった Tannen が、社会性の強かった目的を、より言語学的な目的をもって推進した感があり、その流れを受け継ぐ形で発展した社会言語学における「会話分析」、「談話分析」が、言語教育関係者によく知られるようになった。ただ、このタイプの後続の研究には、目的が現象の記述にあるのか、言語行動のなんらかの原則を一般化して言語教育に応用したいのかが不明確で、数少ないデータの恣意的な解釈を、過度に一般化するような記述の仕方が気になるものも多いという印象を免れない感がある。さらにその後、近年では、CAのアプローチが言語教育関係者にも知られ、用いられるようになってきている。

データ数が少ないこと自体や、質的分析が問題であるということでは決してないが、最も問題なのは、その研究目的と方法が適合していない場合である。例えば、(1)のエスノメソドロジストたちによる会話分析(CA)、(2)の相互作用の社会言語学的アプローチでは、元々は社会や人種の問題のあぶり出しや解決を目的としており、会話の分析は、それ

らの特定の問題を解決するための「一手段」と考えられていたため、質的アプローチが有効だった。日本語教育のための研究に、これらの方法を用いる際には、これらの研究方法の趣旨をよく理解した上で、その適用が妥当か否かを考えて適用する必要がある。

また(5)の認知科学者らによる認知の社会性の記述や解明を目的とするアプローチの中の一部は、「認知プロセスの解明」のために、発話文のプロトコルの記述が重要だと捉えているということなので、これも日本語教育研究に適用する場合は、その妥当性を十分に吟味する必要がある。量的分析を前提としてきた心理学の中の新しい動向として、質的分析の重要性が主張されるようになってきているが、このアプローチは、その代表的なものと言えよう。要は、目的に応じた方法の選択、或いは、複数の方法の併用も、柔軟に考える必要があるのである。(6)の批判的談話研究は、社会学、政治学などに近い学際的広がりを見せており、最近では、日本語教育にも取り入れられるようになってきている(名嶋 2018 等)。

一方、「量的分析」に該当するのが、(3)、(4)、(5)の一部、及び(7)になる。(3)は、言語学の中でも「話し言葉コーパス」を作成し、多数の用例を分析しなければ明らかにできないことが多々あることを主張し、「話し言葉の文法」の構築も視野に入れている。(4)の心理学者による第一言語習得の研究は、第二言語習得研究や日本語教育との関連も深い。日本語教育研究関係者には、あまり知られていないと言ってもいいだろう。心理学の主要な興味は、言語行動も含めた人間の行動の一般法則の解明にある。心理学は、今世紀半ばまで、徹底的な実証科学を目指してきた経緯から、言語行動や自然会話分析に対するアプローチも、量的処理をほぼ暗黙の前提としていると言ってもよい。そのため、心理学全体の中では、社会的相互作用としての会話を対象とする研究は相対的には少ないものの、1973年に、R. Brown が、初めて子供の発話を収集し分析した結果を発表したのが発端となって(Brown 1973)、主に、養育者と子供の対話の分析を中心とする第一言語習得研究が盛んになった。その後、量的分析を可能にするために、文字化の原則の検討、開発、データベース化が進んだ。The Child Language Data Exchange System (CHILDES) (MacWhinney & Snow 1985; MacWhinney 1995) は、最近では、言語学者にもよく使われるようになっていく。しかし、このシステムは幼児の第一言語習得研究に適するように開発されているため、形態素の数や、タイプ・トークンの比率(Type-Token Ratio)をほぼ自動的に算出する等、種々の便利な機能を備えてはいるが、日本語の大人の会話の特徴である長い発話文やその間に挿入されるあいづち等の処理方法の記述や工夫がない等の問題があり、大人の会話の分析、或いは、語用論的分析に適しているとはいえないという難点がある。

その他にも、社会心理学者らによる会話の研究には、コミュニケーション障害(disorders of communication)研究の一貫として行われているもの、高齢者に対するコミュニケーション(Communication with older adults)の仕方に、ベビー・トーク(子供に対する話し方)と共通するものがあることを問題視する観点から行われているものなど、現実的な問題解決へのニーズや社会的な問題意識が動機となっている一連の研究がある(Ryan, Hummert & Boich 1995 等)。いずれも、言葉のやりとりの相互作用性、現象の社会性を重視する形で、60年代後半から盛んになってきている。これら心理学的手法による会話の分析の結果とその知見は、量的分析や統計処理によってある程度一般化できる形で示されているため、そういう意味では、日本語教育にも取り入れやすい。ただ、多くの量的分析の特徴とも言えるが、会話の中の実際の発話のやりとり(発話内容)が具体的に示されていないことも多く、その点は、日本語教育への応用という観点からは、問題となる。そういう意味で、日

本語教育の観点からは、実証的研究方法論に基づくとともに、会話の中身も例示して論じるような量的分析と質的分析の融合が望ましいといえる（宇佐美 2015）。

4 目的によって異なる「量的分析」のタイプ

3 で概観した (3) の言語学者を中心とするアプローチ（使用基盤言語学 Usage-based Linguistics）、(4) の心理学者を中心とするアプローチ（養育者と幼児の社会的相互作用研究等）、(7) の情報工学系研究者を中心とするアプローチ（対話システム研究）は、それぞれ興味の中心は異なるが、データの蓄積と共有、コンピュータ処理を念頭においているという点、量的分析方法を取るという点で、別稿で扱う『総合的会話分析』（宇佐美 2015、2019）と共通する面がある。ただ、言語学者は、コンピュータ処理がしやすいという時、データベースの中から、例えば“going to”と“gonna”等が同じ意味を持つものとして、容易に検索・抽出できるというようなことを重視して「文字化の原則」を開発するなど、あくまでも「言語の形式」に着目したものがほとんどである。一方、心理学者は、目的に応じて語彙の使用分布等の言語的な要素も扱うが、主に、「様々な相互作用における各発話の機能が人間関係の維持や構築にいかにかかわっているか」ということに主関心がある場合が多い。従って、コーパス自体を対象にして「特定の言語形式」の検索をかけるというよりは、研究者各自が目的に応じて、コーパスの中の会話データに、各発話文の機能などについて、自分の分析したい項目のコーディングを行い、その頻度や割合を従属変数として、研究者が設定した独立変数（話者の属性等）との相関関係や因果関係を検証するという形をとるものが多い。質的分析とは異なり、ある程度のサンプル数が必要なため、文字化資料のデータベース化を行うが、必ずしも「言語資料としてのコーパス」の作成を目的としているわけではない。むしろ、「人間の相互作用」の有力なデータの 하나가「生きた会話」であると捉え、それをいかにデータ化して蓄積・共有するかというのが主関心になる。また、認知心理学者や情報工学系のアプローチの中には、「認知のプロセス」を解明するために実験を組み、会話の中の要素を従属変数と捉えて数値化して検証しようとするものも多い。また、会話の音声だけを中心に分析して音声認識に役立てようとする活用法もある。このように、「会話・談話の量的分析」と言っても、その目的や方法は様々なのである。

ただ、量的分析のためには、ある程度まとまった数のデータが必要なことから、会話コーパスの構築と共有化の必要性が主張され、最近、日本語においては、形態素解析や語彙や文型等の分析のためだけでなく、人間の「相互作用」の語用論的分析に資するよう開発された自然会話コーパスが公開されてきている（宇佐美 2007abc、2011、2018; 宇佐美・中俣 2013; 宇佐美・山崎 2018）。また、日本語教育との連携を意識した共同構築型 WEB 教材の機能も持つ「自然会話リソースバンク（Natural Conversation Resource Bank: NCRB）」も構築されてきている³（宇佐美 2012）。

さて、このように、関連分野が相互に影響しあい、複雑な様相を呈している「談話分析」「会話分析」、広くは、「談話研究」にかかわる状況を、言語研究だけでなく、関連分野も視野に入れて簡単にまとめると、以下の3点が言えるだろう。

- 1) 「狭義の談話分析」と「広義の談話分析・会話分析」は、前者が言語構造の解明を主たる目的とし、後者が、言語・社会・人間の相互作用の解明を主たる目的としているという点で、大きく異なる。
- 2) 広義の談話分析は、「会話分析」と呼ばれることが増えてきているが、厳密には、こ

の「会話の分析」の分野には、目的や方法論が異なる幾つかのアプローチがある。

- 3) 一番大きなくくり方として「談話研究」という用語があるが、それが含む内容は、既に言語学の範囲を超えている。

上記3)の「談話研究」は、1990年代頃までは、言語研究側からみた学際的アプローチの呼び方であるという感があったが、最近では、工学における知能情報学などの人工知能研究、人間とエージェント・人間とコンピュータとのインタラクション研究 (Human Agent Interaction: HAI, Human Computer Interaction: HCI) における「対話研究 (Spoken Dialog Systems and Analysis of Conversation)」の中でも文レベルを超える研究が望まれるようになり、新たな観点として注目を浴び始め、文脈を重視する研究の総称のように使われ始めている。

5 談話研究と言語教育

以上にまとめたように、今日では様々な分野で「談話研究」が盛んになっているが、「第二言語／外国語教育」とも関連が深い、社会言語学、語用論の分野で「談話研究」というと、最近では、むしろ言語学における狭義の談話分析ではなく、「話し言葉」における、ある程度長い「談話」、つまり、「会話」における「相互作用」に焦点を当てた研究を指すことが多くなってきている。これらの分野の中で、最近では、質問紙調査や談話完成法 (discourse-completion test) の結果からだけでは明らかにできない、実際の相互作用におけるダイナミックな言語使用を捉える必要性が叫ばれるようになり、それが、昨今の「会話の分析」への関心の高さ、研究の増加となって表れている。それは、「言語を社会とのかかわりの中で捉えようとする社会言語学」、「言語使用の法則を解明しようとする語用論」の発展とほぼ期を一にしていると言ってもよい。同様に、これら関連分野における流れは、これまで言語の構造の教授を中心に行ってきた言語教育においても、外国語／第二言語における「自然なコミュニケーション能力」の育成へのニーズが増加してきたこととあいまって、実際の言語運用、すなわち、言語の「機能」がより着目されるようになり、さらには、相互作用という「談話」レベルの言語行動の研究成果に基づきながら、より効果的な指導法を構築していくことが必至であるという言語教育における大きな流れにも、影響を与えている。

「第一・二言語習得理論」は、言うまでもなく「言語教育」と非常に関連が深く、心理学・言語学双方の影響を受けながら発展し、現在では、既に一分野として確立したと言ってもよい分野である。この「第一・二言語習得理論」に関わる研究においても、従来は文レベルのものが中心に扱われてきたが、1990年代以降、ターン・テイキングや話題の管理 (話の進め方)、会話のストラテジー、ポライトネスに関する研究等が進み、日本語教育に取り入れることの必要性が叫ばれ、実践もされるようになってきている (東 2017; 高木 2017; 宇佐美 2017 等)。さらに、最近では、間接発話やポライトネスなどの談話レベルの要素、語用論的要素がいかに習得されるのかということに関心が持たれるようになってきている。これは、まさにこういったことを、外国語／第二言語教育の中で扱う必要があるというニーズとも連動しているのである。

言語教育は、談話分析、会話の分析、第二言語習得論、語用論、広くは、広義の「談話研究」と連動しながら、併行して発展してきた感がある。しかし、厳密に言うと、談話研究の成果は、日本語教育のカリキュラムや教材、指導法などの現実的実践に直結する部分に体系的に反映されるまでには至っていない。21世紀を迎えようとしていた頃、他の分野

と同様、日本語教育においても「パラダイムの転換」が声高に叫ばれた。2020年代を控える今、これまで20年間で真摯に振り返るとともに、改めて、21世紀の基盤となる日本語教育のあり方について考え、「パラダイムの転換」を実現する必要がある。そして、その新しいパラダイムを支える柱の一つが、「談話研究」の成果であることは、間違いない。

<付記>

本稿は、2018年8月3日（金）、2018年日本語教育国際研究大会（ICJLE2018）において行った、『国立国語研究所連続講義』1に基づくものである。

また、本稿で触れた『BTSJ 日本語自然会話コーパス（略称）』、『自然会話リソースバンク（NCRB: Natural Conversation Resource Bank）』は、国立国語研究所の機関拠点型基幹研究プロジェクト「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」サブ・プロジェクト（リーダー：宇佐美まゆみ）、およびJSPS 科研費18H03581「語用論的分析のための日本語1000人自然会話コーパスの構築とその多角的研究」（研究代表者：宇佐美まゆみ）の成果の一部である。

注.

1 扱うテーマの関係上、宇佐美（1999、2000等）と一部重なる内容もあることをお断りしておく。

2 「言語処理学会第25回年次大会」テーマセッションC4、D4参照

<http://www.anlp.jp/nlp2019/program.html#D4>

3 <http://ncrb.ninjal.ac.jp/> 研究用に自然会話データを登録・ダウンロードするための入り口と、教材用として、自然会話を素材とする教材を登録・利用するための入り口がある。2019年度中に公開予定。

<参考文献>

Brown, R. (1973) *A First Language: The Early Stages*. Harvard University Press.

Budds, K., Locke, A. and Burr, V. (2017) 'Using Discourse Analysis in Social Psychology' in Brooks, J. and King, N. (eds.). *Applied Qualitative Research in Psychology*. Palgrave Macmillan: 144-157.

Fairclough, N. (1995) *Critical Discourse Analysis*. Longman publishing company.

Gumperz, J. (1982) *Discourse Strategies*. Cambridge: Cambridge University Press.

Halliday, M. A. K. and Hasan, R. (1976) *Cohesion in English*. Longman.

Hymes, D. H. (1962) 'The ethnography of speaking' in Gladwin, T. and Sturtevant, W. (eds.). *Anthropology and Human Behavior*. Washington D.C.: Anthropological Society of Washington: 13-53.

Hymes, D. H. (1974) 'Ways of speaking' in Bauman, R. and Sherzer, J. (eds.). *Explorations in the ethnography of speaking*. Cambridge: Cambridge University Press: 433-452.

MacWhinney, B. and Snow, C. E. (1985) The child language data exchange system. *Journal of Child Language* 12: 271-296.

MacWhinney, B. (1995) *The CHILDES project: Tools for analyzing talk*. 2nd Edition. Hillsdale, NJ:

- Lawrence Erlbaum.
- Nishida, T. (ed.) (2017) *Human-Harmonized Information Technology*, Volume 2, Springer.
- Potter, J. and Edwards, D. (2012) 'Conversation Analysis and Psychology' in Sidnell, J. and Stivers, T. (eds.). *The Handbook of Conversation Analysis*. Blackwell Publishing Ltd: 701-725.
- Ryan, E. B., Hummert, M. L. & Boich, L. H. (1995) Communication Predicaments of aging: Patronizing behavior toward older adults. *Journal of Language and Social Psychology*. Vol.14, Nos.1-2. Sage Publication Inc: 144-166.
- Sacks, H., Schegloff, E. A. and Jefferson, G. (1974) A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation. *Language* 50 (4): 696-735.
- Snow, C. E. (1992) Perspectives on Second-Language Development: Implications for Bilingual Education. *Educational Researcher* 21 (2): 16-19.
- Snow, C. E., Perlmann, R., Gleason, J. B. and Hooshyar, H. (1990) Developmental perspectives on politeness: Sources of children's knowledge. *Journal of Pragmatics*. Volume 14 (2): 289-305.
- Tannen, D. (1984; 2nd ed. 2005) *Conversational Style: Analyzing Talk Among Friends*. Oxford University Press.
- Tomasello, M. (2003) *Constructing a Language: A Usage-based Theory of Language Acquisition*. Cambridge M. A.: Harvard University Press.
- Weiss, G. and Wodak, R. (eds.) (2003) *Critical Discourse Analysis: Theory and Interdisciplinarity*. Basingstoke: Palgrave Macmillan.
- Wodak, R. (ed.) (1989) *Language, Power and Ideology: Studies in Political Discourse*. Amsterdam: John Benjamins.
- 宇佐美まゆみ (1999) 「談話の定量的分析 -言語社会心理学的アプローチ-」, 『日本語学』 18(11), 40-56.
- 宇佐美まゆみ (2000) 「談話研究と言語教育」, 『AJALT』 23, 22-26.
- 宇佐美まゆみ (2007a) 『BTS による多言語話し言葉コーパスー日本語会話 1 (日本語母語話者同士の会話) 2007 年版』, 東京外国語大学.
- 宇佐美まゆみ (2007b) 『BTS による多言語話し言葉コーパスー日本語会話 2 (日本語母語話と学習者の会話) 2007 年版』, 東京外国語大学.
- 宇佐美まゆみ (2007c) 『BTSJ による日本語話し言葉コーパスー日本語会話 1 (初対面・友人、雑談・討論・誘い)』, 東京外国語大学.
- 宇佐美まゆみ (2008) 「相互作用と学習ーディスコース・ポライトネス理論の観点から」, 西原鈴子・西郡仁朗編『講座社会言語科学 第4巻 教育・学習』, ひつじ書房: 150-181.
- 宇佐美まゆみ監修 (2011) 『BTSJ による日本語話し言葉コーパス (トランスクリプト・音声) 2011 年版』 (2015 年に一部改訂).
- 宇佐美まゆみ (2012) 「母語話者には意識できない日本語コミュニケーション」, 野田尚史編『日本語教育のためのコミュニケーション研究』, くろしお出版: 63-82.
- 宇佐美まゆみ (2013) 「会話データの作成・分析ー『総合的会話分析』と「基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese: BTSJ)」ー」, 『日本語学』 32(14), 132-147.
- 宇佐美まゆみ・中俣尚己 (2013) 「『BTSJ による日本語話し言葉コーパス (トランスクリプト・音声) 2011 年版』 の設計と特性について」, 『第3回 コーパス日本語学ワークショップ予稿集』, 217-228.

- 宇佐美まゆみ (2015) 『『総合的会話分析』の趣旨と方法―量的分析と質的分析の必然的融合―』(特集：日本語教育の研究手法―「会話・談話の分析」という切り口から―), 『日本語教育』162, 34-49.
- 宇佐美まゆみ (2016) 「なぜポライトなつもりがインポライトになるのか―ディスコース・ポライトネス理論の観点から日本語教育に示唆できること―」, 『ヨーロッパ日本語教育』第21号, 73-81.
- 宇佐美まゆみ (2018) 『BTSJ 日本語自然会話コーパス (トランスクリプト・音声) 2018 年版』, 国立国語研究所. (宇佐美 (2007abc) もほぼ含む).
https://ninjal-usamilab.info/lab/btsj_corpus/
- 宇佐美まゆみ (2019) 『『総合的会話分析』に基づく研究―『BTSJ 日本語自然会話コーパス』と『自然会話リソースバンク (NCRB)』との連携に触れながら―』, 『ヨーロッパ日本語教育』第23号.
- 宇佐美まゆみ・中俣尚己 (2013) 『『BTSJ による日本語話し言葉コーパス (トランスクリプト・音声) 2011 年版』の設計と特性について』, 『第3回 コーパス日本語学ワークショップ予稿集』, 217-228.
- 宇佐美まゆみ・山崎誠 (2018) 『『BTSJ 日本語自然会話コーパス (トランスクリプト・音声) 2018 年版』の紹介と『BTSJ 文字化入力支援・自動集計・複数ファイル自動集計システムセット』を用いた分析法』, 計量国語学会: 1-6.
- 高木三知子 (2016) 「「お手伝いしましょうか」がインポライトネスに変わるとき」(パネル: インポライトネスと日本語教育―異文化理解促進のために日本語教育に何ができるか―), 『ヨーロッパ日本語教育』第21号, 69-73.
- 東伴子 (2016) 「フランス人学習者は、日本人のインポライト場面をどう認識するか―異文化理解へ向けての考察―」(パネル: インポライトネスと日本語教育―異文化理解促進のために日本語教育に何ができるか―), 『ヨーロッパ日本語教育』第21号, 64-69.
- 平岡 拓也他 (「説得対話システムにおける話題誘導に基づく対話制御」, 『情報処理学会研究報告』1-6.
- 宮本友樹・片上大輔・重光由加・宇佐美まゆみ・田中貴紘・金森等 (2018) 「ポライトネス・ストラテジーに基づく会話エージェントの言語的な振る舞いの違いが人との関係性構築にもたらす効果―初対面における冗談の心理効果―」, 『知能と情報』Vol.30, No.5, 753-765.
- 名嶋義直 (2018) 『批判的談話研究をはじめる』ひつじ書房.
- 西田豊明 (2000) 『インタラクションの理解とデザイン』, 岩波書店.

<参考サイト>

- 宇佐美まゆみ研究室 HP <https://ninjal-usamilab.info/lab/>
「基本的な文字化の原則(Basic Transcription System for Japanese: BTSJ)について」
https://ninjal-usamilab.info/about_btsj/
「BTSJ 日本語自然会話コーパスについて」 https://ninjal-usamilab.info/lab/btsj_corpus/
「日本語学習者の日本語使用の解明」(リーダー: 宇佐美まゆみ) の HP, 国立国語研究所
基幹型プロジェクト『日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明』(平成 28 年 4 月～) <https://ninjal-usamilab.info/>

「BTSJ 使用報告」 https://ninjal-usamilab.info/btsj_use-report/

BTSJ, 及び, 『BTSJ 日本語自然会話コーパス (2018 年版, それ以前の版)』を利用した論文の書誌情報を報告すると、自動でリスト化されて HP に掲載される。また、いろいろな研究者の「BTSJ 使用論文」の書誌情報が閲覧できるようになる。『基本的な文字化の原則 (BTSJ)』や, 『BTSJ 日本語自然会話コーパス』を利用した論文であれば、どなたでも『宇佐美まゆみ研究室 HP』から利用報告を入力することができるので、是非活用されたい。

『自然会話リソースバンク (Natural Conversation Resource Bank: NCRB)』(2019 年度中に公開予定) <http://ncrb.ninjal.ac.jp/>